

記紀神話の死生観と自然観（四・完）

黒崎輝人

はじめに

前稿においては、日本固有の世界像が垂直構造的にどのようなものであったかを見てきた。そこでは、地下世界には「ねのくに」と「よみのくに」があること、両者は独自性を持ちながらも同一視もされつつあったことを論じた。

本稿では、もう一つの別世界、海に向こうの理想郷とされる「とこよのくに」についてみておきたい。これもまた独自の完結した世界でありながら、上記二者と微妙に重なり合っている。

まず、本論に入る前に辞書的な確認をしておきたい。

「とこよのくに」の「よ」は上代特殊仮名遣いの乙類に属し、「世」の意味であって、甲類に属する「夜（よ）」ではない。永遠なる暗黒の世界ではなく、永遠なる時間、不変の世界を意味する。

「とこよ」という語は「永遠の」「不変の」という一般的な意味でも使われており、例えば『万葉集』446番の、大伴旅人が天平二（七三〇）年に大宰府からの帰京の途中で詠んだとされる歌、

吾妹子が 見し軻の浦の むろの木は 常世にあれど
見し人ぞなき

の、木は今も変わらずにあるが、それを見た妻はもういない、のようにも使われる。この使い方では「とこよのくに」という別世界はほとんど意識されていない。

また、皇極紀三（六四四）年三月条には、「常世神」という「蟲」を祭る現世利益の新興宗教の記事がある。祭れば貧者は富を得、老人は若返ると喧伝されたという。この場合は豊かな生活が約束され不老不死でもある神仙的世界が背景に想定されているが、現世における利益を「とこよ」という語で表しているにすぎまい。

本稿では、別世界、異界としての「とこよ」「とこよのくに」を対象とする。

一 タヂマモリ伝説の「とこよのくに」

まず、垂仁紀の田道間守（たちまもり）伝説の「常世国」がある。垂仁記にもほぼ同じ説話が伝えられる。比較的短文であるのでまず原文を引用しておく。

（垂仁九〇年七月朔）天皇命田道間守、遣常世国、令求非時香菓（香菓、此云箇俱能未）。今謂橘是也。

二〇一三年一月二八日受付

* 江戸川大学 人間心理学科教授 日本文化史・思想史

（垂仁九九年…天皇、…崩…）

（明年三月壬午）田道間守、至自常世国。則齋物也、非時香菓八竿八纒焉。田道間守、於是、泣悲嘆之曰、受命天朝、遠往絶域。万里踏波、遥度弱水。是常世国、即神仙秘区、俗非所臻。是以、往来之間、自経十年。豈期、独浚峻瀾、更向本土乎。然頼聖帝之神靈、僅得還来。今天皇既崩、……

天皇は、非時香菓（ときじくのかくのみ）を求めて、田道間守を常世国に遣わした。日本書紀成立時のものとされる注によると、非時香菓とは橘（たちばな）のことだという。

十年後、田道間守が、「非時香菓、八竿（やほこ）八纒（やかげ）」を持ち、帰還した時すでに天皇はなくなっていた。田道間守は「泣（いさ）ち悲嘆（なげ）きて曰」う。

命（みこと）を天朝（みかど）に受けたまはりて、遠く絶域（はるかなるくに）に往（まか）る。万里（とほく）波を踏みて、遥（はるか）に弱水（よわのみず）を度（わた）る。是の常世国は、即ち神仙（ひじり）の秘区（かくれたるくに）、俗（ただひと）の臻（いた）らむところにあらず。然（しか）るに聖帝（ひじりのみかど）の神靈（みたまのふゆ）に頼（よ）りて、僅（わづか）に還（かへ）り来（まうく）ること得（え）たり。

常世国がどこにあるか、「万里踏波、遥度弱水」というのであるから、大海を渡り、はるか西の方、崑崙山の麓にあるという、軽いものの代表である鴻毛でさえも沈んでしまうという不思議な水の流れる「弱水」を越えてさらに向こう側、はるかに遠い「絶域」とされている。「田道間」は但馬であろうから、物語の舞台は日本海側であり、日本海をわたって朝鮮ないし中国本土に到達して、さらに西へ向かうという世

界像で一貫している。

そして行き着く「とこよのくに」は「神仙秘区」であって、普通の人が到達できる場所ではない。しかしながら天皇の「神靈」のおかげで、なんとか帰ってくる事ができた、と。

すでに指摘されているように、ここには中国の神仙思想の影響が強い。日本固有の柑橘類といってもよい橘の起源にかかわる物語でありながら、神仙思想の影響を除いてしまうと、「とこよのくに」という名称以外、日本固有のものを指摘するのも困難なほどである。

ともあれ、中国大陸の西の彼方、神仙世界として想定されている「とこよのくに」がここから読み取れる。

二 スクナヒコナ神話の「とこよのくに」

次に『日本書紀』神代紀第八段宝剣出現章一書第六の、大国主神（おほくにぬしのかみ）と少彦名命（すくなひこなのみこと）の物語の「とこよのくに」がある。

大国主神、亦名大物主神、亦号国作大己貴命、亦曰葦原醜男、亦曰八千矛神、亦曰大国玉神、亦曰顕国玉神。…大己貴命、与少彦名命、戮力一心、経営天下。…其後、少彦名命、行熊野之御碕、遂適於常世郷。亦曰、至淡嶋、而縁粟茎者、即弹渡而至常世郷矣。…初大己貴神平国也、行到出雲国五十狭狭之小浜。…是時、海上忽有人声。乃驚而求之、都無所見。頃時、有一箇小男、以白麩皮、為船、以鷓鴣羽、為衣、随潮水、以浮至。

この異伝では、大国主神の別名がまず並べられる。記紀において個々のエピソードはそれぞれの異名で語られるのだが、この物語はそのうちの一つ、大己貴命（おほなむちのみこと）の名で語られる。オホナ

ムチとスクナヒコナが力をあわせて「天下経営」したことが語られ、そののち、スクナヒコナは「とこよのくに」に行つた、という。該当部分を読み下しておこう。

少彦名命、熊野之御碕に行（いた）りて、遂に常世郷（とこよのくに）に適（いでま）しぬ。亦曰はく、淡嶋（あはのしま）に至りて、粟莖（あはがら）に縁（のぼ）りましかば、即ち彈（はじ）かれ渡（わた）りて常世郷に至りましきといふ。

古代において、人なり神なりがこの世界からいなくなる、別の世界に移動する、ということは「死」ぬということと理解していいから、スクナヒコナは死んで「とこよのくに」へ行つたということになる。そこは、「熊野」の岬から行つた、というから、紀伊半島の先の太平洋の彼方、ということになる。

別伝の「あはしま」は「粟島」でもありうるから、スクナヒコナは水稲農耕以前の雑穀栽培と結びついていた可能性もある。こちらの場合は現実の地理との対応関係は確定できない。同じ一書第六で、スクナヒコナは出雲の浜辺でオホナムチと出会つたという。

初大己貴神、国平（くにむ）けしとき、出雲国の五十狭狭（いささ）の小浜（をばま）に行到（ゆきま）して、。是時、海上（わたつみのうえ）に忽（たちまち）に人の声あり。乃ち驚（おどろ）きて求むるに、都（ふつ）に見ゆるところなし。頃時（しばらく）ありて、一箇（ひとり）の小男（をくな）あり、白藪（かがみ）の皮を以て、船に為（つく）り、鷓鴣（さざぎ）の羽を以て、衣にして、潮水（しほ）の随（まにま）に、浮き至る。

日本海側の出雲と太平洋側の紀伊と、神話的な対応関係があることはすでに指摘されているが、「とこよのくに」に問題を限れば、スクナヒコナが「とこよのくに」からやってきたと考えられていたか否か、判断できるだけの材料はない。

ともあれここからは、「とこよのくに」が海の彼方にあること、神が「死」んで行く世界であることが読み取れる。

スクナヒコナに関しては、『古事記』中巻、仲哀天皇の段の息長帯日売命の歌謡、

此の御酒は わが御酒ならず 酒の司（原文・久志能加美くしのかみ）常世（原文・登許余とこよ）にいます 岩立たす 少御神の神寿ぎ 寿ぎくるほし 豊寿ぎ 寿ぎもとほし 献り来し 御酒ぞ あさず食せ ささ

に見える「常世」も同じ意味で使われている。

思想体系本『古事記』の補注・中巻231は、「少御神」をスクナヒコナのこととする。また、「くしのかみ」の原文の「美」は上代特殊仮名遣いの甲類で、乙類の「神」の「み」とは別音とし、「司」の意味だとする。

いずれにせよ、「少御神」という神のいる世界を「とこよ」としていることは疑いない。

三 神武東征説話の「あまのくに」

三つめは、神武天皇の兄、三毛入野命（みけいりぬのみこと）の最後を語る場面である。

海中卒遇暴風、皇舟漂蕩。時稻飯命乃嘆曰、「嗟乎、吾祖即天神、

母即海神。如何、厄我於陸、復厄我於海乎。」言訖、乃拔劍入海、化為鋤持神。三毛入野命、亦恨之曰「我母及姨、並是海神。何為起波瀾、以灌溺乎。」即踏浪秀、而往乎常世郷矣。

いわゆる神武東征の物語の一節である。大阪湾から上陸した東征軍はそのまま東進して大和を目指すのだが、長髓彦（ながすねひこ）の軍勢との最初の戦闘に敗れてしまい、この戦いで長兄の五瀬命（いつせのみこと）は矢傷を負ってしまふ。東征軍は戦略を変え、海上から紀伊にまわり熊野から北上して大和にはいるうとするのだが、その途上、イツセは海上で亡くなり、さらに暴風に遭遇する。

これは全文読み下しておく。

時に稲飯命（いなひのみこと）乃ち嘆（なげ）きて曰はく、「嗟乎、吾（あ）が祖（おや）は即ち天神（あまつかみ）、母（いろは）は即ち海神（わたつみ）なり。如何（いかに）ぞ、我を陸（くが）に厄（たしな）め、復た我を海（わた）に厄（たしな）むや。」とのたまふ。言ひ訖りて、乃ち劍（つるぎ）を抜きて海（うみ）に入りて、鋤持神（さひもちのかみ）となる。三毛入野命（みけいりののみこと）、亦た恨みて曰はく「我が母（いろは）及び姨（をば）は、並びに是（これ）海神（わたつみ）なり。何為（いかに）ぞ波瀾（なみ）を起（た）てて、灌溺（おぼほ）すぞや。」とのたまひて、即ち浪（なみ）の秀（すゑ）を踏みて、常世郷に往（い）でましぬ。

次兄のイナヒと三番目の兄ミケイリヌは、自分の母と祖母は海神の娘であるのになぜ海上で苦しめられるのかと言ひ、暴風を鎮めるため、次々と海中に身を投ずる。そしてイナヒは「鋤持神」となり、ミケイリヌは「常世郷に行った」という。

これだけの記述であるが、この「常世郷」はスクナヒコナの「とこ

よのくに」とほぼ同一のものと考えてよいだろう。神が「死」んで行く世界である。そして海中にある。

四 浦島伝説の「ユヅメノケ」

四つ目はいわゆる浦島太郎の物語の原型となる物語で語られる「とこよのくに」である。

これには三つの史料が残されている。まず、日本書紀の雄略天皇二年秋七月条のそれである。読み下し文だけ挙げよう。

丹波国の餘社（よぎ）郡の管川（つつかは）の人、瑞江（みづのえ）の浦嶋子（うらしまのこ）、船に乗りて釣す。遂に大亀（かめ）を得たり、便（たちまち）に女（をとめ）に化為（な）る。於是、浦嶋子、感（たけ）りて婦（め）に為（す）。相逐（あひしたが）ひて海（うみ）に入る。蓬莱山（とこよのくに）に到（いた）りて、仙衆（ひじり）を歴（めぐ）り觀（み）る。語（こと）は別卷（とまき）に在り。

詳しくは「別巻」を参照せよということであろう。全文引用するまでもないほどに、当時すでに知られた物語だったのだろう。

ここでは中国の神仙思想において東海三神山の一つとされる「蓬莱山」が「とこよのくに」と読まれている。「仙衆」という熟語といい、タヂマモリの物語と同様、神仙思想の影響が強いことが窺われる。

この点は、『万葉集』の「浦島子伝説」や『丹後国風土記』逸文の「筒川の嶋子（しまこ）」の伝説でも同じである。次に、『万葉集』の一七四〇番、高橋虫麻呂の作とされる長歌から見ておこう。これは要所のみ、現代語訳を交えつつ、抜粋する。

「墨の江の岸」で沖を行く釣り船を見ていると、昔のことが思い出される、と歌いだされる。

「水江の浦島の子」が「海若（わたつみ）の神の女（をとめ）」にであい、「常世（とこよ）」に至り、「海若の神の宮の内の重（へ）」の妙なる殿（との）」で不老不死の暮らしをしていたものを、家に帰りがつたばかりに全てを失った、と歌われる。

まず、「わたつみ」の宮がある場所が「常世」とされている。それは海神の宮殿であるから海中にあると考えていいのだろう。そしてここは不老不死の世界であり、地上世界とは時間の経過が異なっている。そこで三年は地上世界での人間の寿命を超えていた。

三つめは、『丹後国風土記』逸文の「筒川の嶋子（しまこ）」の伝説である。これが最も詳しい。風土記編者は、元の国司の伊予部連馬養が書き残したものと「乖（そむ）くことなし」という。雄略紀に言う「別巻」とどのような関係にあるかは未詳であるが、風土記編纂の段階ですでに文字化され、流布していたことがわかる。

物語を追っていこう。

雄略紀と同様、雄略天皇の時代のこととされる。舞台は、丹後国与謝郡の日置の里、筒川村である。この村のひと、日下部首の先祖とされる、「筒川の嶋子」が主人公で、その人となりは、「姿谷秀美、風流無類」と描写される。

嶋子が、ひとり小船で三日三晩釣りするも、獲物を得ず、かわりに五色の亀をえた。不思議に思いながらも寝てしまつと、亀はたぐいなき絶世の美女に変身する。

どこから来たのかという嶋子の問いに「女娘（をとめ）」は答える。

「天上（あめ）の仙（ひじり）の家の人なり」

と。天上世界からやってきたのだという。そして嶋子に問う。

「賤妾（やつこ）が意（こころ）は天地（あめつち）と畢（を）へ、日月（ひつき）と極（きは）まらむとおもふ。但（ただ）、君は奈何（いかに）か、早（すみや）けく許不（いなせ）の意（こころ）をしらむ」といひき。

あなたと一緒に永遠に生きたい、あなたはどうか、というのである。嶋子が承諾すると、「をとめ」は棹を廻らせて「蓬山（とこよ）」に行こうといい、嶋子が目をつぶると、あつという間に「海中（うみなか）の博（ひろ）く大きな嶋」に着いた。そこは、「地（つち）は玉を敷けるが如し。闕台（うてな）は暎映（かげくら）く、楼堂（たかどの）は玲瓏（てりかがや）く」という、見たことも聞いたこともない場所であった。「闕台」や「楼堂」など、中国風の宮殿が想定されているとみてよいだろう。

ふたりが手を携えて門に入ると、「昂星（すばる）」の化身の七人の童子と、「畢星（あめふり）」の化身の八人の童子が、それぞれに「是は、亀比売の夫なり」といい、「をとめ」が亀の化身の「かめひめ」であることが判明する。「昂星」といい「畢星」といい、これも中国的な星宿の思想の影響下にあることは明らかである。

このあとの「かめひめ」の両親とのやり取りがあり、この世の人間と「仙都（とこよ）」の神仙が出会うことの奇跡的なことが強調される。タヂマモリの「常世」と同様に普通の人間の行ける世界ではない、とされているのである。

ついで婚姻の祝宴のようすが描かれる。「仙哥（とこよのうた）」という表現がある。そして歓を極めた祝宴の後、二人はついに「夫婦の理（みとのまぐはひ）」をなす。

こうして三年がたった。嶋子は突然に地上世界を懐かしくなり、父母を恋しく思うようになる。嶋子の様子に異変を感じた「女娘」が理由を問うと、親族から離れて「神仙（とこよ）の塚（くに）」に来たが、恋しさに耐えかねている。できることならば一度は元の世界に戻って父母に会いたい、と答える。

ここからはよく知られた悲劇的結末に転げ落ちていく。別れ際に「玉匣（たまぐしげ）」をわたされること、筒川の里に戻り、すでに「三百余歳（みもとせあまり）」が経っていること知らされること、「神女（かみをとめ）」に逢いたさのあまり、約束を違えて「玉匣」を開けてしまふこと、が語られる。匣を開くと、嶋子の若々しくかぐわしい容姿はあつという間に「蒼天（そら）」に飛んで行ってしまった。

嶋子は二度と会えないことを悟り、なすすべもなくさまようのであった。

物語は最後に嶋子と「女娘」のやり取りの歌三首と、「後の世の人」の歌二首とを載せて終わる。その中から「とこよ」にかかわる表現を含む二首を挙げる。

嶋子から「女娘」への問いかけ、

常世べに 雲たちわたる 水の江の 浦嶋の子が 言持ちわたる

と、後世の人の歌、

常世べに 雲立ちわたる たゆまくも はつかまどひし

我ぞ悲しき

である。

さて、丹後国風土記のこの物語にみられる「とこよ」の特徴を確認

しておこう。まず、神仙思想による修飾を除いてしまうと、日本固有の概念と思われるものがほとんど想定できないことは、タヂマモリの物語と同様である。文字化されて伝えられていることも、中国古典を下敷きにして、ないしは中国古典の影響下での創作である可能性を高めるものであろう。

そして、ここでは天上世界と海中世界が連続していることにも注意しておきたい。それは「女娘」がどこからやってきたかという嶋子の問いに「女娘」が答える場面のほかに、最後の反歌のうちの二首に、「常世べに雲たちわたる」という表現が使われていることからもうかがえる。水平線の彼方に浮かぶ雲の下に、「とこよ」はあると考えられていたのであろう。そしてこれは日本固有の世界像と言つてよさそうである。

以上、古代における「とこよ」関連の史料を見ると、どうやら二つに分類することができそうである。

ひとつは、神仙思想の影響が強いもので、こちらの場合は影響を受ける以前の日本固有の世界像が想定しづらいものである。逆に言えば、最初から神仙思想の影響下に創作された可能性が強いものである。

ふたつめは、神仙思想の影響がなく、神が死後に行く世界とされているものである。こちらは逆に、日本固有の世界像であったと考えて矛盾はなさそうである。

おわりに

前稿において、「ねのくに」に三つの類型があることを論じたが、「とこよのくに」もまた二つの類型に分けられそうである。神の死後の世界としての「とこよ」と、文学的創作に係る「とこよ」と。そして双方に共通するのは、普通の人は行けない世界、という点である。

そして、「とこよのくに」と「ねのくに」は、あるいは神の死後の世界として、あるいは海の彼方の世界ないし海中の世界として、微妙に重なり合う。さらには「よみのくに」とも重なっていく。

前稿で論じたように、「よみのくに（よもづくに）」の「よみ（よも）」は「闇（やみ）」と関係があるとされている。日本固有の死者の世界は暗黒の世界であったというのが通説である。

また、これも前稿で論じたように、垂直の地下方向よりもむしろ水平方向に移動した先にあるとされてきたようである。この世界との境界である「よもつひらさか」は漢字表記だと「坂」を含んでおり、垂直的な位置関係が示されるが、本来は「さかひ」であって水平関係で解釈可能だとされている。

そこへ中国から「黄泉」のイメージが伝わる。これは垂直に下方向、地下にあるとされていた。

両者が融合することで「よみのくに」は地下にあるとされていくのだが、それでも、平安初期の成立とされる『日本霊異記』上巻30縁の地獄訪問譚でも、二つの駅を越えるほどの距離で世界を分ける大河があり、閻魔王庁があつて、さらに南に地獄らしき世界があることになっている。仏教の世界では明らかに地下世界である「地獄」が平安初期に至ってもなお水平方向で理解されていることは、日本における固有の死後の世界像の根強さを語るものであろう。

「ねのくに」と「とこよのくに」と「よみのくに」は八世紀以降、それぞれの独自性を保ちながらも、他方では同一視され、混同されても行くのだが、本稿が注意したいのは、海上西の遙かかなたにあるという「とこよ」と、紀伊半島の熊野の彼方にあるという「とこよ」とが、それぞれ阿弥陀如来の西方極楽浄土と、観音菩薩の補陀落浄土とに姿を変えていくのではないかと思われることである。

すぐ上で述べたように、「地獄」の受容に日本固有の死者の世界像

が影響したのならば、浄土の受容にも固有の世界像が影響したと考えるべきであろう。日本における浄土思想の普及の背景には固有の世界像の存在を想定すべきではないだろうか。

固有の世界像は相互に影響しあいながらも完全には融合しないまま、中国的な世界像の影響を受け、さらに仏教の影響を受けていくのである。

以上、記紀神話を中心に日本古代の死生観や生命観と自然観の特徴を探ってきた。最後に全体像を簡単にまとめておきたい。

最初に、「葦原中国（あしはらのなかつくに）」と呼ばれるこの世界の持つ生命力や生産力への信仰と信頼を確かめることができた。それはこの世界そのものが本来的に持つ力とされていた。

この世界を取り巻いて、天上世界である「高天原（たかあまがはら）」、死者の世界である「黄泉国（よもづくに・よみのくに）」があり、「根国（ねのくに）」と「常世国（とこよのくに）」がある。

垂直構造的に「高天原」「葦原中国」と対応するのは「根国」であり、「黄泉国」は本来は水平方向に想定されていたが中国思想の影響で地下世界へと変貌したようである。「常世国」は水平方向にはるか彼方の世界とされていた。

「黄泉国」と「高天原」では明確ではないが、「根国」と「常世国」には、その世界そのものが持つ独特の力が想定されていたことが読み取れた。「根国」と「常世国」はいずれも同じ名で呼ばれながら具体的なイメージの異なる世界像が含まれていたが、その中に独特の力を示唆する物語があつた。「根国」は「罪」を浄化してしまう力を持つ世界であり、またオホクニヌシの「国主」たるゆえんの力にかかわる世界であつた。「常世国」は時間を超える力を持つ世界であつた。

人の死の起源にかかわる「黄泉国」を含めて、これらの世界の結節点に、「高天原」に由来して「葦原中国」を「治（し）らす」天皇が

いる。常人の行き着けぬ世界である「常世国」も天皇の力で往復できた。

この世界の海や山は天皇家の祖先であるイザナキとイザナミによって生み出されたが、「天孫降臨」後の天皇家の系図に、重複して再び組み込まれていく。この世界の自然も天皇を結節点としている。

日本古代の王権がなぜ「天皇」だったのか。政治的視点からだけでは決して説明しきれないだろう。ましてそれがなぜ現代まで続いているのか、解明の鍵は神話にある。

（注）

引用史料は、『日本書記』と『万葉集』及び『風土記』は古典文学大系本を、『古事記』と『律令』は思想体系本を、『延喜式』は国史大系本を、それぞれ使用した。ただし、旧漢字を適宜新漢字に換え、動詞・副詞はかな標記に変更するなど、読みやすく手を加えたところがある。

また本稿は研究史の総括に触れず、史料を忠実に読み解くことに専念している。そのため、論文としてではなく、研究ノートとして発表している。